

三納ニシヨサ遺跡・徳用クヤダ遺跡

野々市では近年、中南部地区と北西部地区において区画整理事業が実施されています。この事業に伴う発掘調査によって、それぞれの地区から中世の村の跡が発見され、北加賀地域における中世集落の状況が明らかになりつつあります。

中南部地区にある三納ニシヨサ遺跡は、2000～04年(平成12～16)にかけて発掘調査が行われました。この遺跡は手取川扇状地の扇^{てどりがわせんじょうち}の扇^{せん}央部^{おうぶ}に位置し、大小の礫^{れき}に覆^{おお}われた土地に集落が形成されています。集落には掘立柱建^{ほったてばしらたてもの}物や^{たてあなしょういこう}竪穴状遺構・土坑^{どこう}などが密集^{すず}しており、珠洲^{すず}焼^{やき}、越前焼^{えちぜんやき}など国産の陶器のほか中国から輸入された青磁^{せいじ}等の磁器、さらには菊や鳥の絵柄のある銅製の鏡も出土したことから、集落内には周辺地域を支配した有力者が居住していたと考えられます。出土遺物から14～15世紀を中心とした集落が存続したことが分かりました。

一方、北西部地区にある徳用クヤダ遺跡は、2004年(平成16)から発掘調査を行っています。徳用クヤダ遺跡は扇状地の扇^{せん}端部^{たんぶ}に位置する室町時代の集落跡です。発掘調査では大小の区画溝で区割りされた宅地が確認されました。宅地内には掘立柱建^{ほったてばしらたてもの}物や^{たてあなしょういこう}竪穴状遺構、土坑などが認められます。区画溝は規則的に配置されており、計画的な宅地割がなされています。

遺跡の一角には大きな溝で囲まれた宅地を確認しています。この宅地内には掘立柱建物群、大型の土坑や竪穴状遺構などが複数確認



発掘調査風景 北より 2006年(平成18)

(徳用クヤダ遺跡)

されました。また、出土した遺物には中国製の青磁香炉や青磁花瓶、碁石など特殊な遺物が出土していることから、この宅地は有力領主層の屋敷地にあたりと考えられます。



いしれき
石礫に覆われた集落跡 南東より 2000年(平成12)

(三納ニシヨサ遺跡)